

フィラスティン [パレスチナ
わが祖国]

PLO Magazine:Filastin Biladi

びらーでい

中東・パレスチナ問題の月刊誌

No.39

Ext.
1983

臨時増刊



イスラエル内にとどまつたパレスチナ人民に
対するファシスト政権の残虐な弾圧。その実
態をはじめて世界の人々につたえる鮮烈な映
像。隠し撮りのカメラが生ま生きとらえ
た衝撃の本。キュメントを含め、弾圧に抗する
パレスチナ人民の闘いを感動的に描く。

構成・演出=カーレブ・ローマ
編集=クリス・アルバティ
音楽=ブセイ・マゼック
制作=PLOカメト映画部

ライブデモ国際映画祭記録映画部門賞受賞作品
イスラエル占領下パレスチナ人民の闘い

ビラード

● 目次 ● 1983 / 臨時増刊号 ● No.39 フィラステイン [パレスチナ わが祖国] びらーでい

特集・映画「土地の日」

- 2 「土地の日」の背景とパレスチナ問題
◎板垣雄三氏（東大教授）に聞く
7 土地の意味するもの——ハッサン老人のこと ◎広河隆一
8 映画「土地の日」シナリオ
9, 11, 13 〈短評〉 ◎土本典昭 ◎小栗康平 ◎白井佳夫
7 〈短信〉 1983年の「土地の日」

◎表紙デザイン協力 栗津 深
◎写真／広河隆一・浅井久仁臣・田淵 晓



* パレスチナ映画製作所のシンボル・マーク

* 遺傳集会のあと、行進の歌
世界の人々の耳に届け
愛する祖国の大地を耕やす
全世界の人々の耳に届け
われらは死すとも
われらは生き残る
われらのうちの一人たりとも
おお抑圧者よ
小さな乳のみ見すらも
隸属を受けいれないぞ
おお行進の歌
映画「土地の日」より
世界の耳に届け
この叫び
われらは生き残ることはない
われらのうちの一人たりとも
おお抑圧者よ
小さな乳のみ見すらも
隸属を受けいれないぞ
おお行進の歌
映画「土地の日」より

イスラエルには、現在60万人以上のアラブ・パレスチナ人が住んでいるが、かれらは第2階級市民としてさまざまな差別と抑圧のもとにある。

1976年3月30日、ガリラヤ地方のアラブ・パレスチナ住民は、シオニスト・イスラエルの土地強奪に抗して一斉にたちあつた。イスラエル内のアラブ・パレスチナ住民が、これほど組織的に整然とシオニスト国家に抵抗の意思をしめしたのは1948年のイスラエル成立以来はじめてのことであつた。

以来3月30日は「土地の日」と呼ばれ、イスラエル内のアラブ・パレスチナ住民、全世界に散らばったパレスチナ人民が、進歩的なユダヤ人と連帯し、土地の強奪・入植に反対し、パレスチナ解放を求めて総決起する一大デモンストレーションの日となつた。

この映画は、土地防衛委員会の指導者たち、市長・町長・村長・農民・婦人・学生・子供たちの証言をもとに、イスラエルの土地とりあげの実態と、その暴虐の数々を告発していく。子供たちの歌うアラララ……平和、平和、友好と連帯をめざして……の歌声が、オリーブやくだものの花さき乱れる肥沃なパレスチナの土地にこだまする。途中途中にはざまれる、イスラエル軍・警の弾圧を8ミリで隠し撮りしたフィルムは、「民主主義国家」イスラエルの仮面をはぎとり、イスラエル内で何があつていているかを初めて映像によって世界の世論に伝える貴重なフィルムである。

ラストは、土地の日1周年を記念して6人の犠牲者を追悼する集会のシーン。ナザレの市長タウフィク・ザヤードは怒りにみちた演説をおこなう。

バックに流れるパレスチナの音楽が、映像のすばらしさをより一層ひきたてている。

パレスチナ問題を 知るためのブック・ガイド ほか

中東問題の核心をなすパレスチナ問題について、理解を深めるためには、次のような単行本や雑誌、映画などが役に立ちます。

〈単行本〉

広河隆一著「ユダヤ国家とアラブゲリラ」(草思社、1971、新装版1982)

PLO研究センター編／阿部政雄訳「パレスチナ問題」(亜紀書房、1972)

板垣雄三編「アラブの解放」(平凡社、1974)

サブリ・ジェリス著／奈良本英佑訳「イスラエルのなかのアラブ人」(サイマル出版会、1975)

PLO編集協力／三留理男報告「パレスチナ」(現代史出版会、1975)

岡倉徹志著「新パレスチナ物語」(三省堂、1976)

広河隆一著「パレスチナ 幻の国境」(草思社、1976)

坂井定雄著「燃えるパレスチナ」(サイマル出版会、1977)

ガッサン・カナファーニー著／黒田寿郎・奴田原睦明訳「太陽の男たち／ハイファに戻って」(河出書房新社、1978)

板垣雄三編「中東ハンドブック」(講談社、1978)

坂井定雄著「PLOと中東和平」(教育社、1979)

森詠著「80年代中東の挑戦」(祥伝社、1980)

小田実著「天下大乱を行く」(集英社、1980)

グレース・ハルセル著／毎日新聞外信部訳「女の中東戦争」(毎日新聞社、1981)

F・アスマール著／城川桂子訳「リッダー・アラブ人としてイスラエルに生きる」(第三書館、1981)

布川プロ編集「報告 中東の革命と戦争」(秀英書房、1981)

フェリシア・ランゲル著／広河隆一訳「イスラエルからの証言」(群出版、1982)

G・H・ジャンセン著／奈良本英佑訳「シオニズム」(第三書館、1982)

H・トウニイえ H・アブダッラー ぶん／ぬたはらのぶあき やく「さかなはおよぐ」(すばる書房、1982)

芝生瑞和著「アラートマクスと石油」(光文社、1982)

中東の平和をもとめる市民会議編「パレスチナ問題とは何か」(未来社、1982)

撮影・三留理男／編集・毎日グラフ「サラーム レバノンの子供たち」(毎日新聞社、1982)

広河隆一編・写真「ベイルート1982—イスラエルの侵攻と虐殺」(PLO中央評議会、発売・社会評論社、1983)

〈雑誌〉

アラブ・トピックス (アラブ連盟駐日代表部発行の月刊誌)

フィラステイン・びらーでい (PLO駐日代表部発行の中東・パレスチナ問題の月刊誌)

〈映画〉

PLOサメド映画部制作「土地の日」(日本語版)

布川プロダクション制作「ベイルート'82」(英語版)

国連制作「パレスチナ人民には権利がある」(英語版)

* 映画その他の資料についてのお問い合わせは、PLO駐日代表部にどうぞ。

「びらーでい」を推薦します

奴田原睦明氏 (東京外大助教授、カナファーニー作品の翻訳者)

フィラステイン (パレスチナ)・びらーでい (わが祖国)といふ、二つの美しくも悲しいひびきをもつこの雑誌は、パレスチナの民衆とわれわれ日本人との交感の場である。

「びらーでい」誌はPLO駐日代表部が編集・発行している月刊誌で、アラビア語で「パレスチナわが祖国」の意味です。予約購読制を原則としております。購読料は年間7,200円(但し法人は14,400円)。半年分から予約を受付けています。学生は半額(年間3,600円)です。PLO(パレスチナ解放機構)駐日代表部が編集発行。編集長はアドルハミード PLO駐日代表。案内リーフ(チラシ)があります。ご利用下さい。

●見本誌星 (ハガキか電話でご請求下さい) 定期購読者の方で見本誌をご希望の方は三部まで無料でお送りします。

●問い合わせと申込みのあて先は〒150東京都渋谷区円山町24-1 K・Mアパートメント101号 PLO分室(TEL 03-496-8423)
●購読料のお振込みには、次の口座を御利用ください。三和銀行渋谷支店(普通預金口座345-125793) 三井銀行渋谷支店(普通預金口座164-4280263)、三菱銀行渋谷支店(普通預金口座135-5679952)、第一勧業銀行渋谷支店(普通預金口座162-1227560) 口座名は、いずれも「フィラステイン・ビラードイ」です。また郵便振替は、口座番号、東京8-62019、「びらーでい」業務部です。

映画「土地の日」の背景とパレスチナ問題

板垣雄三氏（東大教授）に聞く

——これからみる映画は、PLOのサメド映画部が制作した映画で、イスラエルの中のパレスチナ人たちの抵抗を記録したドキュメンタリーですけれども、タイトルになつてお話をいただきたいと思います。

「土地の日」というのは、一九七六年の三月三十日という日におこった、イスラエルの北部のガリラヤ地方——イエス・キリストのゆかりの地で、一九八二年にはイスラエル軍がレバノンに侵入した時には、この「ガリラヤ地方の平和を守るために」であるという、これが一番最初の口実だったわけですが——そのガリラヤ地方で、一九七六年の三月の末に、おこったパレスチナ・アラブのゼネスト、デモンストレーション、呼んでいるわけです。

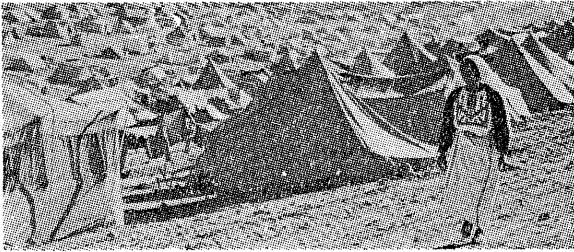
その前の年にイスラエルがイスラエル内部の特に北の地方のパレスチナ人の土地を、非常に大規模に接収するということを決めた。これに対して抗議し抵抗する運動として起こつたわけです。

それで、イスラエルの軍や警察の弾圧の下で、多数の死傷者がでたわけですが、そのためにはむしろイスラエルの内部では、一九四八年にイスラエル国家ができる以来はじめて、もつとも組織的なイスラエル内部のパレスチナ人の抵抗運動が組織され、またイスラエルのなかのユダヤ人の間でも、自分たちの国家がどういうふうにしてアラブの人々を抑圧しているかということについて目をひく人が、新たに多くでてくるようになつた。そういうことで、この「土地の日」というのは、その後、記念されるべき重要な日として毎年、集会がイスラエルのなかでも、またイスラエルの占領地でもひらかれていくわけです。

——イスラエルのなかではパレスチナ・アラブの人たちが「パレスチナ」という言葉を使うのを厳しく禁止されているために、パレスチナ人側の立場からは、単に土地そのものというのではなく、「祖国パレスチナ」という意味づけがあるときいているんですね……また土地そのものだとしても、この一九七五年の時期からだけの土地の取り上げだけでなく、ずっとあつたと思うんですけど、その辺はいかがでしょうか。

難民がたくさん作り出されるということもありますし、その他いろいろな人たちの集団懲罰といいましょうか、家屋を取りこわされてしまふとか、関係者がごつそりと逮捕されて、なんの理由も知らされないままに、長期間にわたって拘留されるとか、あるいは拷問をうけるとか、まあいろいろなことが行なわれてきたわけです。そういうことは、結局はイスラエルという国が大国によって作り出されたからだといえますようか。

シオニズムという運動は、パレスチナにユダヤ人の国をつくり出そうという運動だ



*難民だけがパレスチナ人ではない。

二つの境遇のパレスチナ人たち

——一般的に日本のなかで「パレスチナ人」として受けとめられているイメージといふのは「難民」で、特にレバノンを中心とした「難民」というイメージが非常に強いわけですが、この映画のなかに出でてくるパレスチナ・アラブ人たち、そういう人たちがパレスチナ人の代表であるPLOを支持しているわけですね。

そうです。パレスチナ人といつてもいろいろな立場におかれているというか、いろいろな立場や境遇に、引き裂かれていくと、いろいろなことが現実です。

非常に大きっぽに申しましても、パレスチナ人で、普通に我々がPLOなどに関連してみている人々、これはパレスチナからイスラエルによつて追放されて周囲の国

ともかくパレスチナ人といふのは、このイスラエルの支配の下で、人間としてはずかしめられている——徹底的に人間として侮辱される、というそういうことから始まって、もつと身体的にも経済的にも社会的にも破滅させられる、そういう力がパレスチナ人にむかって働かされている、ということだと思いますね。

この映画に出でていますけれど「ブルドーザー」というのが、イスラエルの支配のひどいシンボルとしてパレスチナ人の上にのしかかっている、というふうにも言えると思います。

それから第二番目には、一九六七年の戦争以来、イスラエルがいまもつて占領している占領地、つまりヨルダン川西岸地区やガザ地帯とか——ゴーラン高地といふのもやはりその占領地で、後にイスラエルによって併合されます、こういう六七年以降の占領地に住んでいるパレスチナ人で、イスラエルの軍事占領というものの下に置かれている人々。これは第二番目にあげられるパレスチナ人のひとつの方ですね。

第三番目には、これも非常に重要な要素ですけれども、一九四八年にイスラエルと



確かに、パレスチナ人の土地取りあげとうのは、イスラエルという国ができる前から、もうすでに始まっていたわけですね。一九三〇年代にも、大規模にアラブ農民が土地を失なつて、都市に流れ出していくところが、おこつてきていたわけです。が、大規模な土地取りあげ、あるいは土地からの人々の切り離しというのは、一九四八年、イスラエルという国家が作り出される、その前後に、非常に大規模に起つたわけですね。おつしやる通り、土地取りあげだけにパレスチナ人が直面してきたわけではなくて、四八年におこつた大量住民追放といいますか、そういうパレスチナ人の

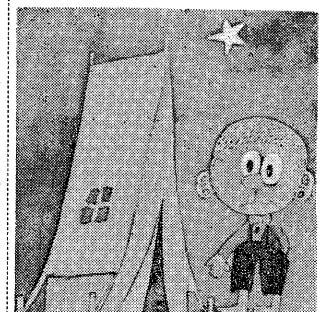
○イスラエルの占領地でイスラエルが占領した西岸地区（ウェスト・バンク）とガザ回廊（ガザ・ストリップ）を指す。ここに約一三〇万人のパレスチナ人たちが住んでいる。西岸とガザ地区のみならずもちろんイスラエルは、エジプトのシナイ半島の一部、シリアのゴラーン高原、レバノン南西部をも占領している。

一般的には一九六七年の中東戦争でイスラエルが占領した西岸地区（ウェスト・バンク）を指す。ここに約一三〇万人のパレスチナ人たちが住んでいる。西岸とガザ地区のみならずもちろんイスラエルは、エジプトのシナイ半島の一部、シリアのゴラーン高原、レバノン南西部をも占領している。

○イスラエルといふのは、一九四七年に国連がパレスチナを分割する「パレスチナ分割決議案」を採択したが、翌年一九四八年5月15日に大國に支えられたシオニストたちがイスラエルの建国を宣言した。イスラエルは一九四八年、五六年、七年などのあいつぐ戦争で国連分割決議の範囲をこえて占領地域を拡大してきた。「イスラエルは、アラブ世界を分断するため、アラブ世界のまん中につくられたシオニスト国家である」とパレスチナ人たちは見てきていた。「イスラエルは、アラブ世界を分断するため、アラブ世界のまん中につくられたシオニスト国家である」とパレスチナ人たちは見てきていた。

○パレスチナ人
パレスチナ人は四五〇万人。一九四八年占領地域に一五〇万、西岸とガザ（六七年占領地域）に一三〇万、ヨルダン川に一六万、レバノンに四十万、シリアに二三万、エジプト五十万、クウェート二八万、リビア二万、サウジアラビア一三万、イラク二万、アラブ首長国連邦・カタール一〇万、その他の国々に一四五万。

パレスチナの子供たちには家がない。
(『二繪本「家』より)



いう国ができるから後、あるいはその前から、イスラエル・シオニストは、パレスチナ人をパレスチナからできるだけたくさん、系統的に追い出すという政策をとつてたわけですが、それでも全部を追い出してしまうということはできなかつた。そこでイスラエルという国ができるから後、イスラエルのなかに残っている、あるいはイスラエル・シオニズムの立場からすれば「残ってしまった」というべきかも知れませんが、そういうパレスチナ人というのがいるわけですね。

これからみる映画というのは、その第三番目の種類の境遇に置かれたパレスチナ人の抵抗というものが、テーマになつてゐるわけですねけれども。イスラエルのなかで、イスラエルの国民といつものなかに包みこまれ「イスラエル市民」であるとして扱われながら実はもう二流、三流の市民として、いろいろな差別や抑圧の下に置かれてゐる。そして先ほども言いましたように、人間などいふに、パレスチナ人が宗教の違いとかいうものを越えて、新しいパレスチナ人

ができるだろうか。というような問い合わせがなされていると思いますけれども、ここにこれから記録され描き出される、そういうパレスチナ人の抵抗それ自体がある新しい平和とか共存とかの方向といふものを、非常に明確に、さし示していると思うのです。

たとえば、この「土地の日」を記念する集会で、キリスト教の教会の鐘とイスラムのモスクの礼拝の時を知らせる合図の声(ワザン)と重なって聞える、というようないふに、パレスチナ人が宗教の違いとかいうものを越えて、新しいパレスチナ人

この映画は、パレスチナ映画の中でも「幻の名作」と言われる「鍵」をつくったガーレブ・シャースの作品で、非常にまとまつたものだと思います。テーマ音楽も古いや人の党員といつしまつて、パレスチナ共産党を支えている、ということのなか

破壊の上にたりたつている

この映画は、パレスチナ映画の中でもユダヤ人として入ってきた人をも包み込んで、新しいパレスチナ人の社会を作り出そう、と思う願いといおうか、むしろたたかいの決意というものが、示されていると思います。

それから先ほど言いましたような、イスラエル内部のパレスチナ人アラブが、ユダヤ人の党員といつしまつて、パレスチナ共産党を支えている、ということのなか

の連帯というものを作り出そう、そこにはユダヤ人として入ってきた人をも包み込んで、新しいパレスチナ人の社会を作り出そう、と思う願いといおうか、むしろたたかいの決意というものが、示されていると思います。

ユダヤ人として入ってきた人をも包み込んで、新しいパレスチナ人の社会を作り出そう、と思う願いといおうか、むしろたたかいの決意というものが、示されていると思います。

ユダヤ人として入ってきた人をも包み込んで、新しいパレスチナ人の社会を作り出そう、と思う願いといおうか、むしろたたかいの決意というものが、示されていると思います。

共存と連帶を求めて

——数の上では、イスラエルの中のアラブ・パレスチナ人は、もう六十五万を越えていると思うんですけれども、しかも先ほどお話をありましたように、さまざまなパレスチナ人たちが、それぞれ離散の中で、あるいは祖國の地にありながら非人間的な待遇をうけている。あるものは爆撃に今もさらされている。そういうさまざまなかたに思っています。

それから先ほど言いましたような、イスラエル内部のパレスチナ人アラブが、ユダヤ人の党員といつしまつて、パレスチナ共産党を支えている、ということのなか

にも、もうすでにパレスチナ人のパレスチナ社会建設、そこで人々の共存、そして周りから大団などが、これまでずっと系統的に推し進めてきたパレスチナの社会のなかにいる人々が、宗教がちがうとか、あるいはアラブとユダヤ人というのは、仇敵であるべきだ、とかいうことをどんどんとつき破っていく、変えていくよな力といふものを証明しようとしているのではない

ことから見ます映画のなかにも、イスラエルのなかで、ユダヤ人がアラブと共存できないならば、このイスラエルという国が、まわりのアラブ諸国と共存することが

持つてきていると思うんですけども、そういう「アイデンティティ」と言われる一体性なり一体感というのは、今後のパレスチナ社会の形成にどういう意味を持つものでしょうか。

これから見ます映画のなかにも、イスラエルのなかで、ユダヤ人がアラブと共存できないならば、このイスラエルという国は二度にわたり分裂。アラブ・パレスチナ人たちが多数を占める。首領はメイル・バイルネル。国会には二議席をもつ。パレスチナ共産党をひきつづく。その後日本でのラカハはイスラエル中のアラブ・パレスチナ人たちが多数を占める。首領はメイル・バイルネル。国会には二議席をもつ。パレスチナ共産党をひきつづく。その後

わけでしょう。

今は、二流というより三流の市民ということになつてゐるということを申しましたけれど、いろいろな意味で社会的な制約をうけ差別をうけております。そういうなかで、政治的にはイスラエルのなかのパレスチナ人アラブという人々は、イスラエルの国家の体制というものに対して、批判の目をむけるところで、このイスラエルの政治のなかの問題として申しますと、イスラエル共産党(ラカハとも呼ばれます)の非常に強力な支持者ということになつてゐるわけです。イスラエル共産党は、むしろこのパレスチナ人たちを、イスラエルは政治的に、具体的にはどういうふうに扱つてゐる

わけ

まず、冒頭のシーンで、子どもたちが歌つているところで、ヘブライ語とアラビア語で歌つているんです。こういう人たち

は、イスラエル人(イスラエル市民)として扱われています。イスラエル人のアラブといいましょうか。「イスラエル人・アラブ」とされている人々が、ただ自分たちはアラブだ、ということだけで抵抗しているのではないか。むしろもっと、ヘブライ語をしゃべるユダヤ人も、アラビア語をしゃべるアラブも、いつしょにたたか

う、という方向を捲し出そうとする、そういうことが子どもたちの歌のなかにもあらわれている、ということですね。そういうことを逆手にとったのがイスラエルの指導者たちのシーンです。ここでシモン・ペレスだの、ベギンやシャロンなどがいろいろ言つてゐることですね。これは一番大事な事実を隠し去つて、そこにふたをして、そして彼らはイスラエル人として暮しているんだ、なにも抑圧されていない、という話をイスラエルの指導者たちがしているわけです。

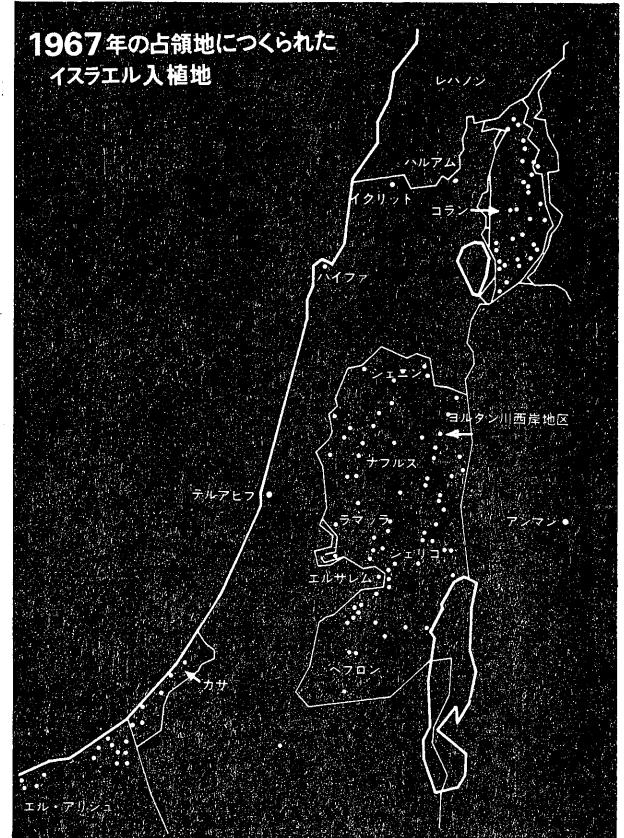
第二には、農地をつぶして、新しい田地が作られている。いかにも近代化といふ姿ですね。これは、日本では、国土開発が進行んで、貧しい農民が、いかにも生活がよくなつていいだろうと、そういう姿のように誤解する人もいるかも知れなけれども、実は「近代化」というものが、どんどん人々の生活を押ししつぶしていく、つまり破壊

パレスチナの映画は、モスクワ、ライプチヒ、パグダードなどの国際映画祭で話題になつてから久しい。「土地の日」も、そういう活動ぶりを示す作品である。この映画の中では八ミリの隠し撮影、フィルムが効果的に使われていて、これが、この部分はヨーロッパのジャーナリストが特殊撮影したものらしい。イスラエルはアラブ・パレスチナたちを弾圧していないと、うそぶけてきたが、この映画は、現場と実態を生々しく再現し、無言で告発している貴重な下キュメンタリーである。

○パレスチナの音楽
○映画人の活躍
○パレスチナの映画の活躍は、モスクワ、ライプチヒ、パグダードなどの国際映画祭で話題になつてから久しい。「土地の日」も、そういう活動ぶりを示す作品である。学校では、パレスチナの歴史と文化について教えることは出来ないし、「パレスチナ」を新聞社名にすることも禁止している。



人々、パレスチナ人の生活を徹底的に破壊するということの上に立っているというのが事実ですね。そういうところでのブルドーザーは「近代化シオニズム」「近代化イスラエル」というもののもつてている牙前に、このブルドーザーに象徴されるような破壊とか破滅とかいう問題が見直されなければならぬということですね。



行為であり、その姿がいかにも近代的にみえ、文明的にみえるようなアパート群というようなものによって暗示されているんですね。

三番目に、果樹園や畑をすつと映すところがありますね。ああいうところは、日本でよく宣伝されている「パレスチナは、もともと、荒地だった。そこにユダヤ人が入植してきて、イスラエルになつてからやつと、ユダヤ人のいるところが緑になつたとか、緑のところがユダヤ人のところで、そうでない白茶けた荒地はアラブの住んでいたところだ」というような話がよくあります。これは日本のみならず、国際的にもそういう宣伝がさかんにされているけれども

パレスチナ人の農業や農地はどういうふうに豊かなものであつたか、ということが「九号地」の説明のところで、没収される土地を見渡すかたちで、実はパレスチナ人の農業とか、パレスチナ人の土地との結びつきとか、パレスチナ人が愛する緑の国土が示されている。

後進的で貧困なアラブを、近代的な生活にして、シオニズムがパレスチナに入つてきた。そしていかにも、そして確かに、新しいアパート群などをつくり出しているけれども、実はそれは、アラブの土地を奪つて、その上に立てられるものであり、そういう「近代化」というものは、その土地の

人々、パレスチナ人の生活を徹底的に破壊するということの上に立っているというのが事実ですね。そういうところでのブルドーザーは「近代化シオニズム」「近代化イスラエル」というもののもつている牙前に、このブルドーザーに象徴されるような破壊とか破滅とかいう問題が見直されなければならぬということですね。

南アフリカとか、ローデンシアとかアメリカの黒人とかが受けている拷問と我々の拷問というのがつながっているんだ、と語るところがありますね。これ、こういうのが普通の農民によって語られるというところで、自分たちのたかいをパレスチナ人は世界に絶えず結びつけて考えようとしている。

最後に、タウフィーク・ザイヤード（ナザレ市長）の演説は、強烈でしたね。アラブの政治的な演説ですが、ことに彼は詩人ですから。やはりイスラエルのなかのパレスチナ人アラブが尊敬する詩人というだけではなくて、もつと離散の地、いろんな国に散らばっているパレスチナ人にとっても、西岸地区やガザの占領地のパレスチナ人にとっても、タウフィーク・ザイヤードの詩は、ものすごく訴える力を持つていて、それがね。パレスチナ詩人であると同時に、イスラエルのなかのナザレの市長である。こういう人物を、イスラエルとしては、どうすることも出来ないのですね。（文責・編集部）

土地の意味するもの

フォト・ジャーナリスト 広河隆一

ものとの関係はその老人が一番よくわかつていたと思う。（写真）
この映画の、弾圧を受けている部分のفيلمを見て、ヨーロッパの人は、自分たちの仲間のイスラエルの人間がこんなことをやるはずがないと疑つた。フィルムを拡大して武器のアルファベットを調べてやつと仲間がやつたとわかる始末だった。それまで、イスラエルがアラブ人を拷問したり、虐待するはずは絶対ないと世界中のユダヤ人が信じていた。そういう報道の中で

世界中の人々もそう思っていた。それを検閲をくぐりぬけた、たつた一本のハミリと何枚かのスチールが世界中にショックを与えたわけです。（談）

パレスチナ人が、農民であるあいだは、イスラエルにとつてたいした存在ではなかつたんです。イスラエルが資本主義から、帝国主義へ發展していくために、パレスチナ人を最下層の労働者として使うことを考え、かれらは、農民たちの土地をとりあげ、そこにユダヤ人たちの入植地を作つて農民たちを日雇い労働者にかえていったんです。

「土地の日」のパレスチナ人五〇万人のゼネスト、村落でのゼネストといった場合、家にいるだけで、たいした危機でない

ように見えます。しかし、これはイスラエルの経済にとつて非常に打撃となり、徹底的にたきつぶす対象になつていてるんです。

この映画のなかで、オリーブの樹の下にすわっているおじいさんが出てきます。かれは、ハツサンという名で、土地と、何百年にもわたって実を実らせたオリーブの樹を収用されました。ハツサン老人は、僕を許されない青々とした麦を手にたばね、それを掲げて、自分はいくらこそが閉鎖された、「土地の日」に僕が訪ねたときには、かれはすっかり衰弱しきついた。あれから、毎朝四時半に起きて鉄条網をかいくぐつて、畑に残った種が育つていて、それも入つていくといつていきました。翌年

*一九七六年の「土地の日」について、さらに詳しくは、広河隆一氏の著書「パレスチナ 幻の国境」（草思社一九七八年）に生々しく記されています。（編集部）

パレスチナの旗を掲げて抵抗

<短信>

今年（一九八三年）の「土地の日」ガリラヤ地方のサクニン村では土地の日の集会のために集まってきた住民たちにイスラエル軍が催涙弾を撃ちこんだ。集まつた人々は、「土地の日」の記念碑に花輪をささげてから、アラバ村の住民たちも参加する頃には、デモ参加者は二万五千人から三万人にもふくれあがつた。

「トライアングル」地方のタイベ村でも午前と午後に二つの集会とデモが行なわれ、これらに参加する学生たちが村の入口で警官隊にひきとめられた。ラカハ（イスラエル共産党）のメンバーの乗つたバスも警察によつて停止を命ぜられた。イスラエルの中の他のアラブの村々では、パレスチナの旗を掲げてタイヤを燃やして住民たちが抵抗した。

この映画の主要部分が、イスラエル当局による弾圧と拷問の証言となる。イスラエルは二万人以上のパレスチナ人政治囚を投獄している。その実態については、イスラエルの女性弁護士の記録「イスラエルからの証言」（広河隆一訳・群出版）に詳細にまとめられている。

○詩人たちは「太陽の男たち」（ハイファに戻つた詩人たちは活躍もめざまし）、この映画に登場するT・ザイヤード氏をはじめ、M・ダルウェイシ、F・トウカン、S・カーセムほかの詩人たちが知らっている。イスラエル当局は、詩人たちの力を恐れ、何人の詩人たちを暗殺した。イスラエルのなかのナザレの市長である。こういう人物を、イスラエルとしては、どうすることも出来ないのですね。（文責・編集部）

① 字幕
P L O
製作
サメド映画部

② 字幕
「土地の日」

P L O サメド映画部制作 構成・演出／ガーレブ・シャース
編集／カイス・アル＝スバイディ 音楽／フセイン・ナザーク

映画 土地の日 シナリオ

イスラエル内にとどまつたパレスチナ人民に対するファシスト政権の残虐な弾圧。その実態をはじめて世界の人々につたえる鮮烈な映像。隠し撮りのカメラが生ましまくらえた衝撃のドキュメントを含め、弾圧に抗するパレスチナ人民の闘いを感動的に描く。



●ライブチッヒ国際映画祭 記録映画部門金賞受賞作品

翻訳＝ウラジミール・タマリ 関場理一 編集＝高岩 仁

- ③ 緑の豊かな、のどかな（もの悲しいテーマ音楽とともに静かに始まる。）音楽
農村風景 遠くに一つの部落
遠くに一つの部落
部落の中へ入ってゆく。
人々にスーパー
「パレスチナの村」
タバの小学生たち
子供達が坐って歌つてい
る。
おお
わたしの兄弟たちよ
平和、平和
平和、平和のためには
平和、平和
友好と協力をめざして
平和、平和をめざして
ララララ…
- ④ 地図の前の人間に
スーパー
「シモン・ペレス（イスラエル国防相）」一九七六年三月二十九日
キヤメラに向つて話す。
（アラビヤ文字入る。）
⑤ カーテンの前の人間に
アップ
「メナヘム・ベギン（イスラエル首相）」一九七七年九月二十九日
キヤメラに向つて話す。
（アラビヤ文字入る。）
⑥ 男の声（シモン・ペレス）「イスラエルに住むアラブ人達は、自分たちがイスラエル市民であると考えてきたと確信する。」



土本典昭
記録映画監督。水俣3部作を手がける。最新作は『原発切抜帖』。著書に『辺境のなかの記録』等がある。

みあえて百聞は一見にしかずと思わずうなつた。旧日帝の暴虐な朝鮮支配と重複して、占領者イスラエルの本体が分かってくる。毎年1枚の写真すら海外に洩れぬようにしてきたというだけに、この内部からの告発映画はライブチッヒ映画祭を昂奮にあとし入れたであろう。8ミリしかなければ8ミリでも撮る。その映画記録の精神が生きた。『まさに記録なければ事実なし』だからである。パレスチナ映画人の戦士的映画行動に拍手を送る。

- ⑥ カーテンの前の人間 男の声（アリエル・シャロン）「これまで、いつ、いかなる時も、我々は土地を没収したことなどはない。」
- 月十二日
- ⑦ 待機する警官隊、銃の準備を始める。
- ⑧ 字幕（サイレント）
一九四八年、シオニストたちは、アメリカを先頭とする帝国主義勢力およびアラブ反動勢力と共に謀して多数のパレスチナ人民を離散させ、その土地を没収した。しかしながらパレスチナ人たちは一部（その数は当時約十六万人）が自分たちの土地にからうじてとどまることができた。」
- ⑨ 字幕（サイレント）
「軍事占領者たちは、占領を開始した第一日めから、様々な集団的弾圧と抑圧、階級的、宗教的差別、強制的な土地の没収など、あらゆる手段を使ってアラブ・パレスチナ人達を追い出そうとしてきた。にもかかわらず、イスラエルの中のパレスチナ人達は（今日では約六十万人にのぼるが、主としてガリリーやトライアングル地方に集中して住んでいる）こうしたパレスチナ人追出し政策と彼等は不屈に闘つてきた。」
- ⑩ 本の表紙にスーパー ナレーション「イスラエルに住む、アラブ・パレスチナ人達の『土地を守る地域委員会』が発行した、土地没収士地の日」
- ⑪ 字幕
「この黒書では、一九七六年三月三十日、『土地の日』にどの様な抵抗が起つたかも記録している。この黒書をもとに、この映画では、『土地の日』の闘いの一周年を記念して犠牲者の追悼集会の準備をカメラで追いながら、一年前の土地の日に何が起つたかをドキュメントして行く。」
- ⑫ 白バックで
白いセーテーの男話す。
男の声（タウフィーク・ザイヤード）「一九七六年の
『土地の日』には衝突ではなく、イスラエルの警察、国

- 字幕
ナザレの市長
「タウフィーク・ザイヤード（イスラエルの国会議員でもある）」
再び白バックで
白いセーテーの男話す。

- ⑯ オリーブ畑の前で
男の声（ジャマル・タルビイ）「我々は人口一万二千人の農村に住んでいます。主に野菜をつくつて生活を支えています。『第九号地』は、豊かな土地として知られる、『バートープ平野』の中にあって、非常に肥沃な土地です。小麦、大麦、トマト、オリーブなどがよくできます。しかし二十年前に、イスラエルの軍隊が侵入して軍事
- 字幕
「ジャマル・タルビイ氏
(サクニン村、村長)」
再びYシャツの男話す。

- ⑭ オリーブ畑の前で
男の声（ジャマル・タルビイ）「我々は人口一万二千人の農村に住んでいます。主に野菜をつくつて生活を支えています。『第九号地』は、豊かな土地として知られる、『バートープ平野』の中にあって、非常に肥沃な土地です。小麦、大麦、トマト、オリーブなどがよくできます。しかし二十年前に、イスラエルの軍隊が侵入して軍事
- 字幕
「ジャマル・タルビイ氏
(サクニン村、村長)」
再びYシャツの男話す。

左にゆっくりパンする。
広い畑、
ふたたびパンする。
元の人物が話す。

演習用にこの土地を使った。それ以来、対立と紛争の焦点となりました。

この土地に入るには、イスラエルの許可が必要となりました。そして現在では軍用地にするということで、この土地に我々が入るのを完全に禁止している。実際は軍用地にするのではなく、イスラエルの入植地をより多くを阻止するのが狙いだったのです。

そこで我々の闘いがはじまつた。サクニンの町では大集会が開かれ、イスラエルの中のアラブ系住民が何万人も参加して、土地の没収と閉鎖に抗議しました。この集会で、三月三十日にストライキを行うことが決定されたのです。」

(14) 地図を前にして説明しながら語る男
宝幕
「ムハマド・ナムネー氏（アラベーリー村、村長）」
子供の写真を取り出す。

(15) ふたたびオリーブ畠の前で話す男
男の声（ムハマド・ナムネー）「第九号地」は軍事演習場として使われていたので、耕作することが困難となりました。その上、イスラエル軍が放置した不発弾の爆発による被害も、しばしばおきました。この二十年間で百人以上の人達が殺されたのです。最後の犠牲は、一九七五年六月一日の事件で、私の息子のマムンが殺されました。写真をお見せしましょう。彼は十二才でした。」

(16) 装甲車、街の中を走つ
発砲
ビルの上から石が飛んで来る。

(17) 高い建物のバルコニー
男の声（ジャマル・タルビイ）「一九七六年の『土地の日』に、サクニンでは、三人が射殺され、七十二人が負傷し、六十四人が逮捕された。軍隊が住民たちを襲ったのです。住民たちは石を投げて抵抗しましたが、「それに対して、軍隊は発砲した。『土地の日』の犠牲者は、全体では六人にのぼったのです。」

(18) 音楽

音楽（かなり激しく）

(19) 大きな新しい道
向うに新しい園地
ブルドーザー
こわされた建物の前で羊をおさむ少年
下で語る農民夫婦
おさむ少年
(20) 大きなオリーブの樹の下で語る農民夫婦
おさむ少年
(21) 女の声（農婦）「その日の朝、私は五時に起きてお茶の用意をしていました。夫や子供たちは眠っていました。六時頃、北の方向からイスラエルの軍隊がやってきて、私は壁によりかかっていました。「私の家には垣根も門もあった。夫やほかの子供たちは階下で眠っていました。」私は家から出ていくといいました。「あなたの方こそ、この町から出ていくつてくれ」と言ったら、兵隊はふり向きざま銃をぶつ放しました。弾丸は私の息子の頭にあたりました。」

男の声（農民）「M Pと警官がやって来て、私は本部まで連行され、二十種類の書類に署名させられました。翌日、自分の土地に戻ってみると、戦車が四台で大麦を踏にじつてあそんでいた。私は戦車の間に分け入って我身に砂をかけて悲しみの仕草をしているとやがて戦車は出て行った。が、煙はメチャメチャにされていました。女の方（農婦）「自分 の土地に入るのに、それでも何度も許可をもらわなければなりませんでした。今年の一月からは許可を出さなくなつて、ついには土地を取りあつた」

(22) 音楽
音楽（かなり激しく）

(23) (バッカは丘や畑)
それ等を指しながら
青年の話
の丘の反対側に見えるのが、その『九号地』です。ムガール山からラームの南側の山々に連なっている所で、平野や丘陵が広がっている一帯です。この地域はイギリスの委任統治時代にクレアル・ジエトシと名づけられましたが、現在では、イスラエル国防省が軍事演習に使うという名目で封鎖しています。しかし実際には、ナハル・サルモンと呼ばれる入植地がつくられています。だからこの道が境界線になっていますが、その後に村の所までひろげてくるだろうと思います。」

(24) 小栗康平
映画監督。『泥の河』(1981年モスクワ映画祭銀賞受賞、国内でも多数の賞を獲得)が第1回監督作品。

あさやかな緑と赤茶けた土地があり、そこで人びとが生きている——ここに生まれる緊張が映画を貫いている。弾圧のようすを語る青年の後で羊たちの群れがゆっくりと動いていくシーンが印象に残る。映像表現のもつ力が、風景の描写をとおしてみるのにせまり、「土地の日」という大きなタイトルのもつ意味がはつきりと伝わる。この土地にパレスチナ人が生きて生活しているというもつとも基本的な主張を映像は力強く語っている。



小栗康平
映画監督。『泥の河』(1981年モスクワ映画祭銀賞受賞、国内でも多数の賞を獲得)が第1回監督作品。

(25) 煙、トラクターの上で語る男性
トランクター作業
足の傷を指で示している。
街角で語る男性立つてい
たれと一緒に倒れてしましました。男の声「私が駆けつけた時、もう一人が負傷していました。自動車で、病院に運ぼうとしたら、軍隊が後から銃を撃つて、車を壊してしまったのです。何とか助けを借りながら病院まで連れて行こうとしたところ、今度は私達を目がけて撃つてきました。手助けしてくれた友人もやられて、未だに歩けないし全く働けません。」

(26) 音楽
音楽（かなり激しく）

主人のアップ
主人のアップ
夫人のアップ
夫人のアップ
(27) 音楽
音楽（かなり激しく）

音楽（かなり激しく）

背中の傷を見せる。

白セーターの少年

グリーンシャツの少年

ベットに寝ながら少年

少年の写真をかかげてい

ナザレ市長の演説

集会の民衆

スローガン①「法外な土地

税の押しつけをやめさせよ」

②「弾圧する者は恥を

羞れ」

③「クファー・カーナ村民

の团结万才!」

④「土地とり上げ命令を撤

回させよう」

⑤「祖国の土地にどどまつて

いる同胞を守るため

に」

拍手する人々

⑯ 字幕

⑰ 字幕

⑲ 字幕

⑳ 字幕

㉑ 字幕

㉒ 字幕

㉓ 字幕

㉔ 字幕

㉕ 字幕

㉖ 字幕

㉗ 字幕

㉘ 字幕

㉙ 字幕

㉚ 字幕

㉛ 字幕

㉜ 字幕

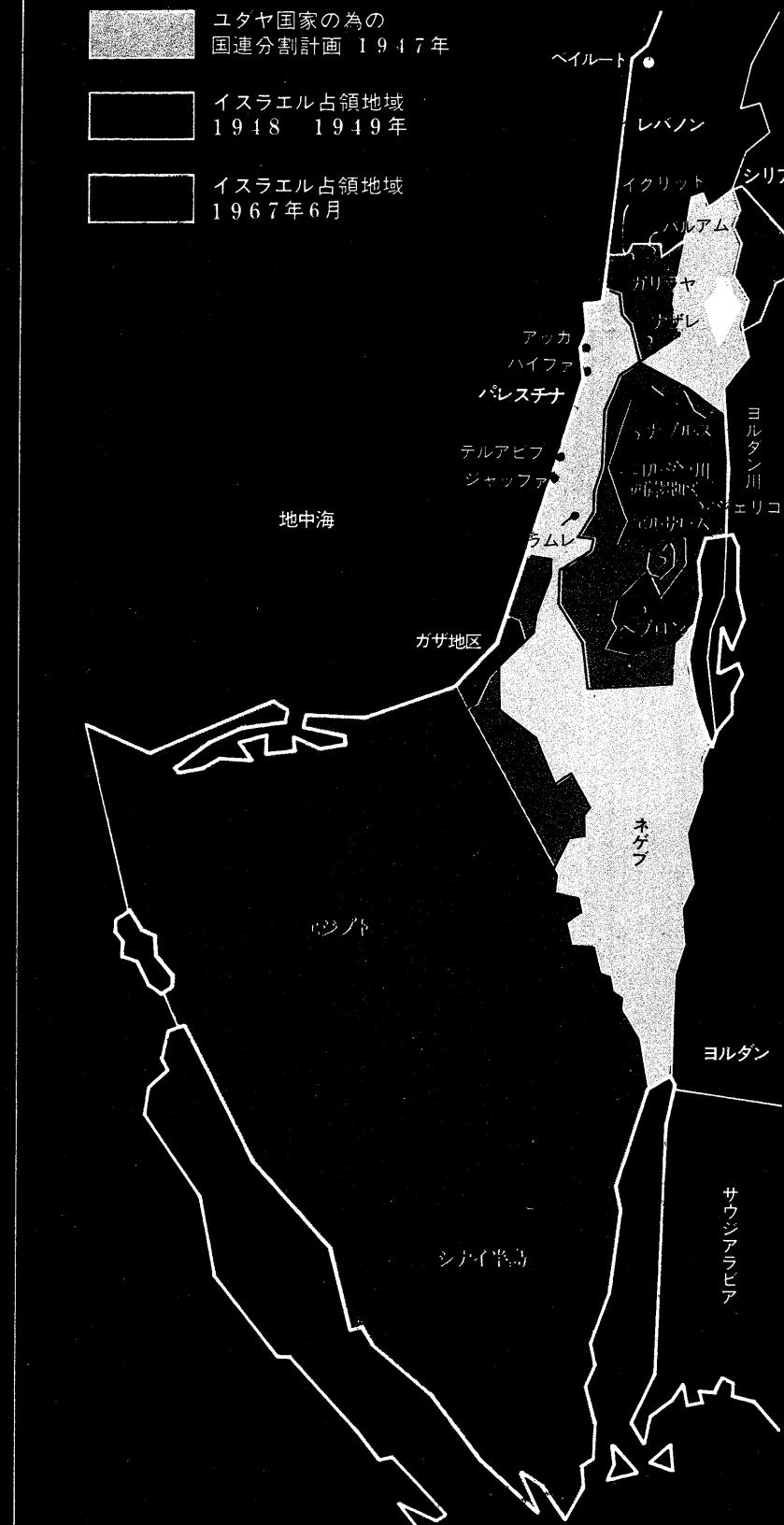
㉝ 字幕

㉞ 字幕

㉟ 字幕

「制作 労働映画社」「解説 東京大学教養学部 板垣雄三教授（中東現代史）」「翻訳 ウラジミール・タマーリ 関場理一」「ナレーター 伊藤惣一」「スタッフ 高岩 仁 佐々木昌彦 佐々木礼子 松川 勉 中原聰一 山本晴彦」「協力 小川町シネクラブ 東京シネアート」

* 「 」内は、編集の都合で日本語版では省略されている部分（編集部）



世界地図から消されたパレスチナ

パレスチナをアラブ国家とユダヤ国家とに分割する決議を国連が採択しました(1947年11月29日)。やがて、この決議を理由に、シオニストたちがイスラエルという国家の樹立を宣言してから(1948年5月14日)、パレスチナは世界地図から消されてしまいました。何十万ものパレスチナ人たちが、故郷から追い出されました。

その後のイスラエルの数次にわたる領土拡張と侵略によって、パレスチナは、ずたずたに引き裂かれていますが、450万人のパレスチナ人たちは、祖国の地パレスチナを自分たちの手にとりもどす日を夢みながら、たたかっています。

上の地図は「奪われた国の子どもたち」(第三書館刊)より



製作にあたって

高岩 仁 (労働映画社・『土地の日』日本語版編集者)

私は、フリーのカメラマンとして、これまで労働運動関係の映画とか、公害、在日朝鮮人問題などを撮ってきました。昨年九月、アラビア語版の『土地の日』を、PLO駐日代表部の関場理一さんの解説でみた時、この映画は、非常に内容があつて出来もすばらしいと思いました。僕自身、パレスチナ問題を勉強していなかつたのですが、この映画には、われわれが、日

本の中において知られていない重要なことが入っていると思いまして、これはなんとか日本語版しなくてはいけないと駐日代表の方々と相談したわけです。そして翻訳、解説、ナレーション、今後の上映運動などすべての面でパレスチナ人民を支援しようとする多くの人たちに支えられて、この映画は誕生し、歩きだそうとしています。イスラエル内部のたたかいを描いた貴重なフィルムとしてこの映画はほんとうに力強い作品です。ぜひ拝がってほしいと思いま

す。

僕は、十年ぐらい前から、『合理化病』『前線』などの労働運動の映画を撮っているのですが

この四、五年、バタツと労働運動の映画が作れなくなっています。

それはいろんな条件があります。それはいろいろな条件があつて、一つには、労働運動が具体的な闘いをやりにくくなっています。そういう時にこそ一人ひとりの労働者が、ものの考え方をしつかりと鍛えなくてはいけない。われわれがやるべきことは、こ

日本にも共通する不正の根

のことです。

そういう意味でもこの映画は重要だと思います。はるかかな

たの国で、不正が行なわれてい

る。その根は、われわれが、い

ま苦しめられている根と同じ

ところにある。またもっと身近な

こととして見た場合、かつての

日本帝国主義時代の朝鮮とまつたく同じことが行なわれている

と思います。

いま、僕は、在日朝鮮人の差別問題の映画を撮っていますが、その時の日本帝国主義の朝鮮に対する差別がいまだに尾を引いています。朝鮮、韓国を名乗つて就職試験を受け

たばかりに、どこにも採用されないとか、金を借りられないとか、それに類するあらゆる差別が残っているんです。日本の資本が、今の韓国に進出することによって、新たな帝国主義的な侵略がまた起きてきています。

パレスチナの地で行なわれることと、日本の地で行なわれていること、その中で闘つているパレスチナ人と、われわれの闘いのことを考え合わせると、この映画をぜひできるだけ多くの日本の労働者・市民・学生にみてほしいと思います。

(談)

先ず英語版のシナリオを準備

関場理一 (翻訳者の一人)

テーマの音楽に、まず魅了された。イスラエルによるレバノン戦争の最中に、この映画のオリジナルを日本のあちこちで上映した時、見た人の衝撃と感動が伝わってきた。

何とかして日本語版を興作して多くの人々に見てほしいと高岩さんが協力を申し出られて

も、オリジナルはアラビア語、

しかもシナリオも何もない。ま

ずアラビア語から英語版のシナリオを映画のテープをもとに作る必要がある。在日のパレスチナ人のウラジミール・タマーリさんが協力してくれた。

ナレーションの伊藤惣一さんもレコードティング直前に訳文の調子をととのえて下さったので、大変にたしかった。板垣雄三先生は国際民衆法廷の準備などで多忙をきわめておられたにもかかわらず、背景の解説を快諾して下さった。ただ翻訳の校閲まではお願いしなかつたために地名など表記の誤りを犯したのが残念でならない。



パレスチナの映画人たちが戦火の中で活躍している。ハニー・ジャウハリーエは1976年4月9日、レバノン内戦で犠牲となった。

フィラスティン・ビラーディ 臨時増刊号 1983年5月13日発行

編集発行人／ファトヒ・アブドルハミード

発行所／PLO駐日代表部

〒153 東京都目黒区青葉台1-4-8 ☎ (03)463-2840
(分室) 〒150 渋谷区円山町24-1 K・M アパートメント 101 ☎ 496-8423

印刷所／株式会社 太平印刷社

●購読料のお振込みには、次の口座を御利用ください。三和銀行渋谷支店（普通預金口座345-125793）三井銀行渋谷支店（普通預金口座164-4280263）、三菱銀行渋谷支店（普通預金口座135-5679952）、第一勧業銀行渋谷支店（普通預金口座162-1227560）口座名は、いずれも「フィラスティン・ビラーディ」です。また郵便振替は、口座番号、東京8-62019、口座名は「ビラーディ」業務部です。

FILASTIN BILADI Ext. 1983 No.39

Edited & Published by PLO Office, Japan; Editor:

Fathi Abdul-Hamid; TELEX: J 27524 FATHI

1-4-8 Aobadai, Meguro-ku, TOKYO, Japan, 153